私の授業～うまくいったこと、いかなかったこと

所属	国際学部国際学科	氏名	熊倉　正修
テーマ	専門教育とキャリア教育の融合を目指して		

私は 2017 年 4 月に本学国際学部に着任しました。それまで二つの大学に勤務し、教員生活は通算で 17 年になります。前任校と前前任校はそれぞれ経営学部と経済学部に所属していました。国際学部のような学際系学部は初体験です。

本学に着任する数年前から、どのような授業をしたら自分は社会的役割を果たしたことになるのか、ということを少し真面目に考えるようになりました。各種のアンケート調査によると、大学新入生が在学中にもっとも望んでいるのは「自分の将来の方向を見つけたい」「将来の仕事に役立つような力を身に着けたい」ということだそうです。卒業後に学生たちを引き受ける企業の大学に対する希望は、「主体性や実行力を身につけさせてほしい」「早くから卒業後の仕事を意識し、目的意識を持って勉強するように指導してほしい」といったことのようです。

しかし大学教員の中には、それらは大学の目的ではない、大学は学問をするところだ、という人が多いと思います。「大学で学ぶ学問が進路の選択や仕事に直接役立つことはあまりないが、長い人生の中では生きてくるはずだし、どう生かすかは学生たちが自分で考えるべきことだ」と考えている人も多いでしょう。私もかつてはそう考えていました。しかしそうしているうちに、だんだん自分が「本当によい商品はこれなのだ」と主張しつつ需要のない商品ばかり作っているエンジニアのような気がしてきました。

大学もかつてに比べるとだいぶキャリア教育に力を入れるようになっています。しかしそうした教育の多くはもともとあるカリキュラムの周辺に接ぎ木された出島のような位置づけで、従来の学問的なカリキュラムを、それが同時に（学生が卒業後の進路を模索し、自信を持って社会に出て行けるよう促すという意味の）キャリア教育にもなるように工夫しようという考えは希薄だと思われます。しかしそれだとキャリア教育が皮相的なものにとどまり、学問的なカリキュラムは多くの学生にとって迂遠で面白くないものになってしまうと思います。

それではどうしたらよいのか、という疑問に対して、私は確たる解答を持っていません。しかし自分の担当科目に関する限り、それを多少なりとも学生や社会の要請にも応えられるように工夫することは可能なはずだし、それをやらなくては役目を果たしたことにはならない、と考えるようになりました。講義科目はカバーすべきことがある程度決まっているのであまり勝手なことはできませんが、初年次教育や演習には裁量の余地があるので、少しずつ内容を工夫するようになりました。私は初年次教育が非常に重要だと考えていますが、今回は紙幅の都合で割愛し、以下では二年次以上の演習（ゼミ）でやっていることを紹介します。

私の専門は経済学ですが、ゼミでは自分の専門に拘らずに内容を構成しています。多くの学生たちにとっての喫緊の課題は、仕事とは一体どのようなものなのか、組織はどのように運営されているのか、世の中にどのような仕事や組織があるのか、私企業や官公庁に勤務する以外にどのような生き方がありうるのかを知り、どこに身を置いて社会人人生を始めるかを考えることだと思います。

そこで、普段の授業では、雇用や働き方に関する法律に触れたり、初歩的な会計を学んでおカネの流れからさまざまな組織を眺めたり、日本と外国の働き方を比較したりといったことを行っています。さいわい（？）日本と

外国では組織の原理やキャリアの考え方が大きく異なるので、国際学部の教育の目的である「グローバル社会の多様性を理解する」ことや「私たちが生活している日本社会の理解を深める」ことにも役立っていると思います。ただし私はこれらの専門家でないため、授業の準備や教材作成はなかなか大変です。

また、いくら教材を工夫しても、学内の勉強はしょせん座学にすぎません。学生たちが大学に閉じこもっていると、その後に飛び込んでゆく社会がどんどん遠のいてゆきます。そこで、各学期に一回、学生たちが自ら学外でさまざまな仕事や活動に携わっている人や機関（団体）にコンタクトし、実際に会ってインタビューした上でその成果をまとめるという課題を行っています。授業で学外者をゲストに呼ぶこともありますが、それだと学生たちは受け身になってしまいます。自分たちで学外に出、成果を得て持ち帰ることがポイントです。

この課題をやらせてみると、学生たちの多くが社会に羽ばたいてゆく準備がまったくできていないことがよく分かります。まず、誰に会いに行けばよいのかが分からない、会ってくれる人が見つからないという学生がたくさんいます。若者なのだから「将来この人のようになりたい、この人のような生き方をしたい」と思う人がたくさんいて然るべきですし、新聞やインターネットでも興味深いビジネスや社会活動をしている人は多数紹介されています。しかし多くの学生たちはスマホでLINEばかりしていて、そうした情報が視界に入っていないのだと思います。

何とか面会の約束をとりつけ、会ってもらうことができても、よいインタビューができる学生は少数です。会う前に十分な下調べをするように強く指示していますが、それができない学生が少なくありません。また、誰でも都合の悪いことは言いたがらないので、相手が積極的に話してくれることだけを聴いているのではよい取材にはなりません。そのことは事前に何回も伝えていますが、素直すぎるためなのか、ふだん他人と議論する経験が不足しているからなのか、「ご意見拝聴」になってしまうケースが少なくありません。

インタビューが終わったあとには、授業中にプレゼンテーションを行うだけでなく、各人が報告書を執筆し、それをまとめて冊子にしています。単なる課題だと考えずに、せっかくだから第三者が読んでも面白いと思う冊子を作ろう、インタビュー相手にも自信を持って読んでもらえるものを作ろうと言っていますが、私がかなり手を入れないとひと様に見せられるものにならないケースが少なくありません。

これらは小さな試みにすぎませんが、「見知らぬ相手に自らアプローチし、自分が求める情報を引き出し、それを相手が満足できる形でフィードバックする」というのは、大なり小なりすべての社会人に要求される能力だと思います。それができなくては就職活動で困るでしょうし、就職後に周囲の評価を得てやってゆくことも難しいと思います。

このような課題を定期的に行うようにしたことで、私にとっての効用もあります。学生たちのインタビュー相手の中には私の視野に入っていなかった非常に面白い人が混じっていて、自分にとっても勉強になります。また、どうしても訪問先を見つけられない学生たちのために、私自身が平素からアンテナを張り、学生たちに紹介できる人や団体を探すことも心掛けるようになりました。私は普段は大学に閉じこもりがちなほうですが、自分自身の社会性を育むことにも役立っていると思います。

ここに書いたことはまだまだ実験中というのが正直なところで、うまくいったことより、いかなかったことの方がたくさんあります。また、どのような授業をすればよいのか、ということに関して、私はまだ悩んでいます。これを読んだ先生がたのお知恵を拝借できれば幸いです。